

<実践事例>

大人数を対象とした参加型オリエンテーションの試み

中原 正樹¹

京都産業大学法学部（以下、「法学部」という。）では、新入生の理解度向上のため、2017年度より新入生オリエンテーションを一方向型の情報伝達式から、事前学習やアクティブラーニング等の要素を取り込んだ新入生参加型オリエンテーションへと転換を図った。

具体的には、(ア)入学前に導入オリエンテーションを実施し、後の履修オリエンテーションにつながる事前学習を義務付けたこと、(イ)入学後に実施するオリエンテーションでスマートフォンを活用した疑似反転授業を実施したこと、(ウ)学生履修アドバイザーを活用し、新入生の理解度に応じたきめ細かな対応に取り組んだこと等である。

法学部では、これらの取り組みによって、その後の学生からの質問がオリエンテーション内容の再説明を要するものから、説明をふまえたうえでの質問へと質的に変化したことを感じる事ができた。

本稿では、法学部でのこれらの取り組みを、大人数を対象とした授業やガイダンスにおける学生の集中力や理解度向上のための転用可能な実践事例として報告する。

キーワード：オリエンテーション、事前学習、アクティブラーニング、反転授業、学生 SA

1. はじめに

法学部では2016年度まで、新入生対象行事として大学への帰属意識の定着と友達づくりを目的とする「J's コミュニケーション」、 Semester 制度や授業科目の種類、履修規定といった大学で学修していくうえで最低限必要となる事項を説明する「履修オリエンテーション」、時間割の具体的な編成方法を説明する「時間割オリエンテーション」、修学や履修に関する相談に応じる「履修相談会」の4つを実施していた。これらの行事は、履修登録日程との関係から4月3日までに終わらせるよう設計されており、情報伝達型のオリエンテーションを実施し、履修相談会で疑問点を解消するという一連の流れとなっていた。

このような中、2017年度学年暦より授業期間を15週確保したうえで留学やインターンシップ等を考慮した夏期休業期間確保のため、授業開始日が1日早まることとなり、新入生対象行事の実施時期や内容の見直しに着手することとなった。

2. 新入生行事の効果と課題の検討

法学部では、見直しにあたり従来までの新入生オリエンテーションの振り返りを行い、目的や課

題について整理した。法学部の2017年度の入学者は592名で、経営学部に次いで多かった。オリエンテーションでは、いかに限られた時間の中で多くの学生に的確に情報を伝え、理解度向上を図るかが焦点となった。振り返りによりあげられた課題は、次の4点に集約できる。

(ア) オリエンテーションが一方向型の情報伝達式となっており、学生の集中力の継続が難しいこと

(イ) 1日で多くの説明を行うため、履修要項の読み上げのような表層的なものとなっていること

(ウ) 対象者（入学者）が多く、理解度に応じたきめ細かなサポートができていないこと

(エ) ひとつの教室に500名以上を収容し実施するため、座席が窮屈であり長時間にわたり履修要項を参照しながらメモをとることが困難なこと

これらの課題により、大学での学びに関する目的やルールについて、その背景や根拠の理解につながっていないこと、さらには学生の理解度に差が生じるといった結果が生じ、学生からの履修相談の増加や履修登録不備等につながっていることが指摘された。

¹ 京都産業大学 教学センター

表1. 主な新入生対象行事の実施スケジュールと変更点

	2016年度	2017年度	2017年度の変更点
英語プレイズメントテスト	3月28日	3月28日	
導入オリエンテーション	—	3月28日	受講姿勢の転換を図るため新規実施。履修オリエンテーションにつながる事前学習内容の説明
J's コミュニケーション	4月2日	3月28日	
学生証交付	4月1日	4月1日	
履修オリエンテーション	4月1日	4月1日	疑似反転授業によるアクティブラーニング型オリエンテーション
時間割オリエンテーション	4月1日	4月1日	学生履修アドバイザーがSAとして新入生をサポート
入学式	4月2日	4月2日	
履修相談	4月3日	4月2日	
履修登録 (一次抽選科目締切)	4月4日 午前9時	4月3日 午前9時	

3. 新たなオリエンテーションの設計と実施

オリエンテーションの見直しは、履修登録日程に対応し、かつ上記課題の改善を図ることを目標に検討された。

履修登録は、4月3日午前9時が締め切りのため、4月1日までに履修に関するオリエンテーションを終え、4月2日を相談日に充てられる日程を検討した(表1)。先にあげた課題に対しては、日程や施設等の限られた環境下において効果を高めるため、新入生参加型のオリエンテーションを計画した。ただし、500名を超える規模であるため、実施にあたっては入念な計画と準備が求められた。以下では、学生の集中力や理解度向上のための取り組みと実施結果を紹介する。

3.1. 導入オリエンテーションの実施

入学後に実施するオリエンテーションの効果を高めるため、事前に導入オリエンテーションを実施することとした。実施日は、新入生の負担を考慮し、英語プレイズメントテストと同日の3月28日とした。

導入オリエンテーションの名称は、大学生活の始まりであること、高校卒業後の休暇期間が終わり、4月からすぐに大学の学びがスタートするという意味を込めて「キックオフオリエンテーション」と名付けた。このオリエンテーションの目的は、次の2点である。

第一に、新入生の学ぶ姿勢を主体的なものへと転換する一助とすること。アプローチとして、高校と大学の違いについて、新入生にもわかりやすい形でスライドを用いて説明した(図1)。さらに、

「大学生活を楽しむためのマインドセット」と題した心理テストを実施し、自分の能力を決めつけず、大学生活で様々なことにチャレンジするきっかけづくり等を行った。

第二に、4月1日に実施するオリエンテーションを学生参加型とするため、必要な事前学習を課した。履修要項や時間割表等とともに、ワークシートとして「履修要項確認テスト」を配付し、履修要項を手引きに履修オリエンテーションまでに取り組むよう求めた。「履修要項確認テスト」の設問は、今後の修学において特に重要と考えられること、授業開始までに理解しておくべき学内ルール、例年、新入生からの窓口での相談や問い合わせが多い事項から26点を設定した。

また、オリエンテーションへの準備として、履修に関するポイントが映像と音声でまとめられている「入学予定者向けDVD(京都産業大学への招

	大学	高校
呼び方	学生	生徒
担任の先生	いない	いる
必要な手続き	自分で情報を入手して行う (やらなくても言ってくれない)	担任の先生が指示してくれる
時間割	自分で決める (一部、決まっているものもある)	すべて決まっている
予習復習	前提であり、予習復習をしなければ授業についていけない	必要だが、テスト前の暗記で少しは挽回可能
学修スタイル	自分の考え、自分の意見を持ち 他者に説明できるようになる	教えられたことを理解(記憶)し解答する

※ 違いをわかりやすくイメージできるように表現している。大学や高校、学部や学科、授業等により異なることがある。

大学生には「主体的な姿勢」が求められる!

図1. キックオフオリエンテーションのスライドの一部



図 2. J's コミュニケーションでのワークの様子

待状)」の視聴、WEB シラバスから履修予定科目を閲覧すること等を課した。

キックオフオリエンテーションは、新入生にとって「大学は、思ったよりも大変なところだ」という印象を与えたかもしれない。しかし、その適度な負荷と緊張が、同日のその後に実施する J's コミュニケーションの効果を引き上げることも狙いとしていた。間接的ではあるが、適度な負荷と緊張が友達づくりを促進し、新入生同士のセーフティーネットの形成につながることを期待した。J's コミュニケーションは、神山ホールで行なわれたが、教員も参加し、おおいに盛り上がっていた(図 2)。

3.2. スマートフォンを活用した履修オリエンテーション

入学後に実施した履修オリエンテーションは、本学の 1 コマ授業と同じ 90 分で構成し、50 分を履修相談室や電子掲示板 POST の利用方法、人権に関する説明等とし、残り 40 分を履修一般事項の説明時間とした。2016 年度からの大きな変更点は、後半の履修一般事項の説明を職員による履修要項を手引きとした読み上げ形式から、導入オリエンテーションで事前学習として提示した「履修要項確認テスト」を用いた疑似反転授業型のアクティブラーニングに切り替えたことである。

この理由は、事前学習を前提とすることで、理由や根拠の説明時間を確保し、履修要項に記載された内容の深い理解につなげることで、窮屈な時間と場所の中で新入生の興味関心を引き付け、集中力を継続させるためであった。

さらに、オリエンテーションによって、授業開始前に、学修姿勢として求められる事前学習の重要性を体験させるという狙いもあった。

3.2.1. 実施方法

500 名を超える大人数でのアクティブラーニングの実施方法を模索した結果、「履修要項確認テスト」の回答を学生に Web 上で入力・送信してもらい、その結果を集計しスクリーンに提示、回答状況をみながら解説を行う方法を採用した。回答の入力・送信方法は、当初クリッカーを考えたが、本学には 500 名を超える規模で実施可能な設備を有していないこと、仮に設備があったとしても、クリッカーを使用する場合には、機器の配付と回収のみで相当な時間を要すると判断し、学生のスマートフォンを活用した Web 上でのアンケートシステムで実施することとした。

アンケートシステムの選定は、無料であること、広告が掲載されないこと、会員登録せずに誰でも利用できること、大人数がスマートフォンでアクセスしても通信が停止したり速度が遅くならないこと、500 名以上のアンケート集計が可能であること、回答方法がシンプルでわかりやすいこと、集計がリアルタイムに把握できるといった条件から「アンケートツクレール」を採用した。ただし、このシステムは、「履修要項確認テスト」の 26 個の設問が上限設定によりできないため、入力先を 2 つ作成し対応することとした。アクセスは、学生に配付する説明資料に QR コードを掲載し、時間の短縮を試みた。

なお、参加する学生については、アクセスにかかる通信料は自己負担になること、スマートフォンを持っていない学生や何らかの事情でアクセスできない学生には、手元の「履修要項確認テスト」の用紙で自己採点することを説明し、協力を求めた(図 3、4)。

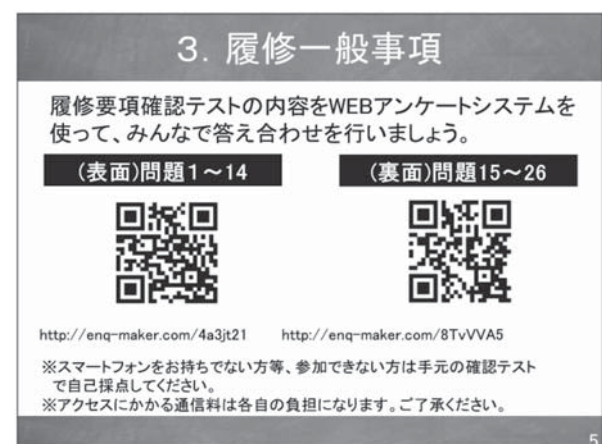


図 3. スマートフォンでの回答先を誘導するスライド



図4. 回答を入力する学生

3.2.2. 実施結果と振り返り

ガイダンスへの出席者数は約570名、アンケート回答者数は、前半(設問1~14)が450名、後半(設問15~26)が281名であった。後半の回答者数が減った理由は、後半の入力を前半の答え合わせの後に実施したため、実施内容を見通した学生の一部が参加を見送ったものとみられる。アンケートの回答までにかかった時間は、前半後半ともに約6分であった。

答え合わせは、設問ごとに前方のスクリーンに回答の集計結果と正答(○か×)、正答理由を表示する形で進めた(図5)。正答率が比較的低いものについては、新入生にとって理解が難しい点と考えられるため、履修要項の掲載ページを参照し時間をかけて解説を加えることとした。新入生はスクリーンに表示される正答と自身の回答を照らし合わせながら、「履修要項確認テスト」に説明内容をメモしていた。

設問全体の回答結果は表2のとおりである。傾向として、設問と履修要項に掲載されている内容



図5. 答え合わせの様子
(スライドの上部に回答の集計結果を表示している)

が同じか近いものについては、75%を超える正答率を示した(設問7、8、9、11、16、17、18、19)。他方で、履修要項の記載内容から一部修正を加えた設問(設問1、4)や履修要項の内容を理解したうえで解釈を要する設問(設問10)は、正答率が50%前後と低くなった。さらに、卒業要件や履修プログラムに関する設問(設問3、22、23、25)は、正答率が50%を下回った。

これらの結果を概観すれば、新入生の半数以上は事前学習課題の「履修要項確認テスト」に取り組んできているものの、その実施状況や理解度にはばらつきがあり、その結果が正答率に現れたものと考えられる。特に下宿学生にとっては、新しい環境で学生生活の基盤を整える時期であったともいえ、時間的制約があったと推察できる。

なお、誤答率が正答率を上回った設問は5つ(設問1、3、22、23、26)であったが、すべて内容の一部に変更を加え、正答が「×」となるひっかけ問題であった。その中で、最も誤答率が高かった設問が、設問26の配当年次に関するもの(誤答率68.3%)である。この認識間違いは窓口対応においても見受けられるものであり、履修要項への記載内容の変更やオリエンテーションでの十分な説明等、改善が必要と考えられる。

3.3. 履修アドバイザーによる新入生サポート

履修オリエンテーション及び時間割オリエンテーションでは、履修アドバイザー7名による新入生サポートを実施した。履修アドバイザーは、法学部が開設している履修相談室にシフト制で常駐している学生SAであり、日常的に法学部生からの修学や学生生活に関する相談対応を行っている。2017年度は3・4年次生、計16名が教員からの推薦により任命されており、オリエンテーション実施前には、5時間の研修を行い本番に備えた。

オリエンテーションでは、名札を着用することや開始時に登壇し自己紹介を実施する等、新入生が気軽に履修アドバイザーに声をかけられる工夫を行った。オリエンテーション実施中は教室を巡回し、個別の質問対応にあたり、オリエンテーション終了後も履修登録等の相談対応にあたった。

新入生にとっては、学生同士であることから困ったときに気軽に相談できる存在であり、特に後半の時間割オリエンテーションでは、履修アドバイザーに多くの質問が寄せられていた。「履修要項確認テスト」の実施結果からもわかるとおり、新入生の理解度には差があるが、教職員に限られ

表2. 「履修要項確認テスト」の設問と回答結果①

設問	正答	学生の回答 (人数 / 率)		
		○	×	無回答
1 電子掲示板 POST は、学生生活を送るうえで必要な情報が流れるため、1週間に1回はアクセスし、情報を確認しなければならない。	×	215 (47.8%)	200 (44.4%)	35 (7.8%)
2 セメスター制とは、1年を4つの学期にわけたものであり、春学期、夏学期、秋学期、冬学期の4つで成り立っている。	×	67 (14.9%)	344 (76.4%)	39 (8.7%)
3 授業科目には、必修科目や選択必修科目等があり、開講されているすべての科目は卒業要件として認定される。	×	225 (50%)	185 (41.1%)	40 (8.9%)
4 単位とは、科目を修得するために必要な学修量(時間)を数値で表したものであるが、事前・事後学習等、教室外での自主学修の時間は含まれていない。	×	76 (39.1%)	233 (51.8%)	41 (9.1%)
5 2単位の講義科目の場合、週1回の授業を受けるには、事前学習2時間、事後学習2時間が求められている。	○	312 (69.3%)	95 (21.1%)	43 (9.6%)
6 履修登録は、必修→選択必修→選択科目の優先順位で行うことさえすれば、シラバスは読まなくてもよい。	×	30 (6.7%)	377 (83.8%)	43 (9.6%)
7 シラバスには、各授業科目の「内容・実施計画、準備学習(事前・事後学習)の内容、到達目標、授業で身に付く力、履修上の注意、必要教材、評価方法」等が記載されている。履修登録を行う際は十分に読み込むことが大切であり、授業開始後も、日々の授業の予習・復習に役立てることができる。	○	397 (88.2%)	10 (2.2%)	43 (9.6%)
8 科目ナンバリングには、各授業科目の分野やレベル等が特定の記号で掲載されている。科目ナンバリングを活用することで、授業科目をつまみ食いの(脈略もなく)履修せず、自分が希望する進路や興味関心にあわせて無理なく学びを深めていくことができる。	○	346 (76.9%)	58 (12.9%)	46 (10.2%)
9 履修登録には、あらかじめ指定された日時で履修するクラス指定科目の他、抽選等により登録を許可する履修制限科目等がある。	○	377 (83.8%)	27 (6%)	46 (10.2%)
10 1学期に履修登録できる単位数には上限が定められており、その制度をキャップ制という。法学部生が1学期に履修登録できる単位数は24単位であり、必ず24単位分の履修登録をしなければならない。	×	176 (39.1%)	227 (50.4%)	47 (10.4%)
11 履修登録は、履修登録期間を過ぎると行うことができない。2017年度春学期の履修登録期間は4月5日(水)までである。	○	343 (76.2%)	61 (13.6%)	46 (10.2%)
12 秋学期の履修登録時には、春学期に履修登録した通年科目は変更できないことから、春学期の履修登録時には秋学期の時間割も参照しながら行うことが必要である。	○	308 (68.4%)	96 (21.3%)	46 (10.2%)
13 履修中止制度は、授業期間の途中で履修を中止することができる制度であり、自分が履修している科目ならすべて行うことができる。	×	114 (25.3%)	291 (64.7%)	45 (10%)
14 授業への出席は、授業中に確認が行われないものもあることから、基本的には自由である。	×	109 (24.2%)	295 (65.6%)	46 (10.2%)
15 原則として、授業回数の3分の2以上を出席しなければ単位の認定が行われないため、逆にいえば3分の1までは欠席してよい。	×	66 (23.5%)	211 (75.1%)	4 (1.4%)
16 休講となった授業や授業の進度を補う授業として補講が行われる場合があり、出席しなければならない。	○	262 (93.2%)	15 (5.3%)	4 (1.4%)
17 オフィスアワーとは、指定の時間には教員が研究室等で待機しており、質問や相談ができる制度である。授業内容に関する質問や学修の進め方、今後の履修計画の相談など、学生生活全般にわたって個人的な相談をすることができる。	○	259 (92.2%)	16 (5.7%)	6 (2.1%)

表2. 「履修要項確認テスト」の設問と回答結果②

設問	正答	学生の回答 (人数 / 率)		
		○	×	無回答
18 試験には、定期試験の他に臨時試験がある。試験は授業期間中の曜日・時限とは異なる時間割で行われる。	○	214 (76.2%)	64 (22.8%)	3 (1.1%)
19 GPA とは、各科目の評点 (100 点満点) をグレードポイントに換算しなおし、その合計を科目の総単位数で割り、1 単位のグレードポイントの平均値を算出するものがある。算出にあたっては、合格科目だけではなく不合格科目も対象となることから、しっかりと履修登録、授業への取り組みが重要である。	○	253 (90%)	23 (8.2%)	5 (1.8%)
20 住所が変更となった場合には、大学に届け出なければならないが、電話番号が変わった場合には、その必要はない。	×	58 (20.6%)	220 (78.3%)	3 (1.1%)
21 期日までに学費の納入が困難な場合には、学費の延納・分割延納を願い出ることができるが、学生の手続は不要である。	×	40 (14.2%)	235 (83.6%)	6 (2.1%)
22 共通教育科目・人間科学教育科目の選択必修 8 単位を満たすためには、人文科学領域および社会科学領域の 2 領域から 4 単位ずつ修得しなければならない。	×	190 (67.6%)	85 (30.2%)	6 (2.1%)
23 専門教育科目・AL 科目は AL 指定科目を 20 単位以上修得することが必要である。	×	139 (49.5%)	135 (48%)	7 (2.5%)
24 キャリア形成支援教育科目の「自己発見と大学生活」、専門教育科目の「プレップセミナー」は 1 年次の春学期しか受講できない。	○	220 (78.3%)	55 (19.6%)	6 (2.1)
25 法学部には履修プログラムが定められており、1 年次秋学期の履修登録時に全員が登録を行わなければならない。	×	174 (61.9%)	103 (36.7%)	4 (1.4%)
26 科目ごとに定められている配当年次は、その配当されている年次の学生しか履修できないことを示している。	×	192 (68.3%)	84 (29.9%)	5 (1.8%)

た時間内で学生の対応にあたるには限界があり、履修アドバイザーの存在は運営面において大きな意味があったものと考えられる。

4. まとめ

オリエンテーションの翌日となる 4 月 2 日の履修相談会には、多くの新生が訪れたが、その用件は半数以上が履修登録内容の確認であり、オリエンテーションの内容を再度説明しなければならないケースは少数であった。履修登録までの期間が短縮された中での今回のオリエンテーションの取り組みは、学生の理解度向上に一定の成果があったものといえる。

今回の取り組みは、新生オリエンテーションを「履修要項確認テスト」というツールを軸にして、事前学習による質的向上と、スマートフォンを用いた疑似反転授業による学生の集中力の維持と理解度向上につなげる試みであった。また、アクティブラーニングの実施に際しては、履修アドバイザーが SA として新生をサポートする体制

を整えた。

オリエンテーションで取り入れた事前学習やアクティブラーニング、学生履修アドバイザー (SA) の活用は、文部科学省中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」(2012 年) や「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」(2014 年) 等において大学教育での導入が提言されているものであるが、授業だけではなくオリエンテーションにおいても有用であるといえる。

一方、限られた時間で大人数を対象とする以上、一定の制約や限界もあった。「履修要項確認テスト」において回答結果にばらつきがあったこと、後半の参加者数が大幅に減ったことは今後への課題といえる。回答状況は集計し可視化できているため、設問の精選や修正により、より効果的に実施できる内容へと改善されることが期待される。

最後に、オリエンテーションでは昨今の学士課程教育の充実に向けた政策動向を意識し、準備学習やシラバスの重要性等について重点的に取り上

げた。これらは、オリエンテーションでの説明以上に、履修過程において定着するものと考えられることから、さらなる授業を中心とした一連のFD活動が進展することが望まれる。

謝辞

本稿の取り組みを支援いただいた法学部事務室のみなさまにお礼申し上げます。事務室の後押しがなければ、この取り組みは実現しませんでした。

また、オリエンテーションで新入生からの相談に予定時間を超えてまで対応し、その翌日の履修相談会においても昼食を摂る時間も無く対応にあたる等、おおいに活躍してくれた法学部学生履修アドバイザーのみなさんに、心より感謝申し上げます。みなさんの存在がなければ、このオリエンテーションは達成できませんでした。

最後に、参加型オリエンテーションに協力してくれた法学部2017年度入学生のみなさんにお礼申し上げます。みなさんの本学での学びが充実したものとなることを願っております。

Participative orientation, Flipping the classroom, Teaching assistant

2018年1月12日受理

1 Center for Academic Affairs, Kyoto Sangyo University

The Benefits of a Participative Orientation for Freshman: A Case Study

Masaki NAKAHARA¹

The faculty of law at Kyoto Sangyo University has delivered its freshmen orientation in a traditional lecture style for a long time. In 2017, a new, more participative method was trialed. Concretely, various measures were adopted such as (1) planning a pre-university introduction, and in that, requiring freshmen to read up on the curriculum before the orientation, (2) flipping the class with the aid of smart-phones, (3) utilizing teaching assistants (Faculty Students) and helping freshmen to increase the depth of their understanding of the curriculum orientation.

As a result, the authors identified that those measures improved the level of comprehension of freshmen. Here we report the results as a case study, which could possibly be applied to similar orientations in the future.

KEYWORDS: Orientation, Preparation,

